

【セッション 1】

「ライフ・チャート」

講師：黒須 優理菜(上智大学神学部神学科 4 年)

【要旨】

「わたしにとっての“召命”って何だろう?」「どうして、わたしはこの道を歩んでいるんだろう?」

生きていく中で、わたしたちは幾度となく選択を迫られ、岐路に立ち、その都度、“なぜ?” “何のために?” “どうして?” と問い、理由や価値を探します。わたしたちの身に起こる様々な出来事(多くの苦難や試練、また、喜びや幸福など)にはどんな意味があるのでしょうか。そして、その経験を通して、わたしたちはどこに導かれているのでしょうか? わたしたちはどこへ遣わされているのでしょうか?

このセッションでは、セミナーのテーマである“召命”そのものを扱い、神さまからの呼びかけに耳を傾け、これまでの歩みについて考えてみたいと思います。

【講師プロフィール】 黒須 優理菜 (くろす ゆりな)

上智大学神学部神学科 4 年。上智大学総合人間科学部看護学科に 3 年在籍後、転部科。15 歳のときに特発性頭蓋内圧亢進症になってから 10 年、倫理を中心として、「スピリチュアルケア」と「病いの語り」について学ぶ。聖イグナチオ教会所属、中学生会リーダーとして 5 年間従事。現在は、一青年信徒として教会内外で活動中。

【セッション 2】 ライフワーク分科会 Part1 A 会場

「マラリア対策で世界を変える」

講師: 狩野 繁之(国立国際医療研究センター研究所 熱帯医学・マラリア研究部部長(医師))

【要旨】

マラリアという病気を知っていますか？世界の熱帯地域で、年間50万人もの命を奪っている感染症です。この地球規模課題の解決のためには、医学だけでなく、貧困がもたらす社会経済学的な格差の問題にも取り組まねばなりません。私は今、ラオスというアジアの最貧国で、同国保健省・パスツール研究所と共同研究を行いながら、その制圧に取り組んでいます。Think and act globally! 私の座右の銘です。学生諸君、未来の世界を変えたいと思わない…？

【講師プロフィール】狩野 繁之 (かのう しげゆき)

昭和61年 群馬大学医学部卒業

学生時代は、空手道部・主将も務め強かった？！書道部に所属・今も書道は趣味で続けている。英語、イタリア語、ラテン語、ポルトガル語、韓国語の習得に挑戦(どれもfluentにはならず！) 山登り、ほぼ毎日の家庭教師、女房となる彼女とのデート(これもほぼ毎日)・・・教会の日曜学校の手伝いなどもちょっとしたか??? 本分を忘れて課外活動に多くの時間を割いていた。また、文化人類学のフィールドワーク(ミクロネシア)やハンセン病対策研修(韓国・カトリック医師会関連)で、熱帯・亜熱帯の環境に学生時代に触れたことが、いまの国際保健分野を志したきっかけとなっている。

平成3年 群馬大学大学院医学研究科博士課程(寄生虫学専攻)修了

ここで、鈴木守教授(当時)に師事してマラリア学を修める。スーダンやブラジル・アマゾンのマラリア対策研究に関わり、ライフワークとする決心を固める。

平成3年 群馬大学医学部寄生虫学教室(助手～講師～助教授)

目標に向かって研究費の申請準備をしたり、論文を書き上げているときに喜びを感じる様になっていった。また、学生教育にも情熱を憶えた時期であった。

平成10年 国立国際医療研究センター研究所 部長 (現在に至る)

橋本龍太郎首相(当時)の「世界寄生虫対策イニシアチブ」達成に貢献するために、東京に単身赴任して(今は家族同居)政策医療に携わった。その後も、国を代表して世界のマラリア対策にかかわるダイナミズムにやりがいを感じている。

(その他併任/現職)

平成11～筑波大学連携大学院人間総合科学研究科	教授
平成21～東京大学大学院医学系研究科国際地域保健学	講師
平成23～群馬大学大学院医学保健学研究科	講師
平成26～ラオス国立パスツール研究所寄生虫学研究室	Laboratory Head
平成27～フィリピン大学公衆衛生学校寄生虫学教室	Visiting Professor
平成28～長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科	客員教授
平成28～認定NPO法人 Malaria No More Japan	理事
平成29～Global Fund 技術審査委員会	委員
平成29～帯広畜産大学原虫病研究センター	客員教授

【セッション 2】 ライフワーク分科会 Part1 B 会場

「私の召命 ～夢とところの光」

講師：巻島 愛(旭川医科大学医学部看護学科助教、助産師、看護師、思春期保健相談士)

【要旨】

「あなたの夢はなんですか？」

子どもの頃にはたくさん聞かれた質問ですが、今のあなたに問いかけてみたら、どんな答えが返ってくるでしょうか。私の今の職業は、助産師です。そして仕事の内容は、大学で看護学生、助産学生を育てることです。普通であれば、大学教員、と答えるのが正しいのかもしれませんが。それでも私は、第一に助産師であることに誇りをもっています。仕事を離れたとき、自分にあるのは、大学教員である私よりも、助産師である私でありたいと思っているからです。

私の夢は、すべての女性を幸せにすることです。女性と限定したのは、女性が幸せになることで、すべての性の生み主である女性から幸せが伝播すると考えているからです。なぜ、今そんな壮大な夢をもつようになったのでしょうか。

私は小さい頃から、「私の夢は〇〇になること」とよく考えていました。最初は、医師でした。家族の影響もありましたが、小学校の社会科で、世界中に医療を受けられず困っている人がいる、と聞いたとき、「私が医者になって助けに行く！」と思ったのが最初だったように記憶しています。それから、紆余曲折を経て、看護師になるのですが、その後また色々な経緯があり、助産師となりました。助産師となり、臨床で働いていた私ですが、助産師だから分娩介助だけをしていればいいのか…、分娩に関わる人だけを対象にしているのか…、そんなことを考えるようになりました。助産師には、日本助産師会の出している助産師の声明というものがあり、私も助産学生だった時、この内容を学びました。そこで、助産師はすべての女性を対象にする仕事だと学んだことが、今の夢に繋がっています。

子どもの頃、最初は職業を夢に考えます。それは、夢が、自分がなりたい姿だからですね。でも、その職に就いた時、今度は自分がどうなるか、ということよりも、そこからどう周りに影響させていくか、を考えるようになりました。それは、人それぞれ違うと思います。でも、私にとってこうした夢の展開は、神様の導きのように思うのです。自分の中で、ピン！と光がつくことがよくあるのですが、それは誰でもなく神様が私の心にピン！と光をつけたのだと思っています。皆さんの心にピン！と光がついたことが見つかるよう、私のお話が少しでもヒントになればと思います。

【プロフィール】巻島 愛 (まきしま あい)

宮崎大学医学部看護学科卒業後、国立がんセンター中央病院手術室に看護師として勤務。その後、天使大学大学院助産研究科を卒業し、助産師として勤務。3年前より現職。セクシュアリティ教育、リプロダクティブヘルス教育を深めるため、思春期保健相談士を取得。研究、教育の傍ら、全世代へのセクシュアリティ教育を目指し、日々奮闘中。

【セッション 2】 ライフワーク分科会 Part1 C 会場

「手を差し伸べて、その人に触れること」

講師：中東 加保梨(都立北療育医療センター 看護師)

【要旨】

私たちの看護はキリスト教の歴史の中にある

古来より看護は、家庭の中で家族によって行われてきた。この看護を家庭の外に出して、今日に続く社会的な看護組織を作ったのは初代キリスト教会の人々である。もちろん、日本の仏教における四箇院のように、キリスト教以外でも看護活動は行われていた。しかし、歴史とは続いていなければ意味がない。現在、私たちが行なっている看護は、他の宗教や文明ではなく、キリスト教の文化から生まれ、発展した看護である。「深く憐れんで、手を差し伸べてその人に触れ」(マルコ 1:41)、「わたしが飢えたときに食べさせ、(中略)病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ」(マタイ 25:35-36)という言葉は、私たちの看護の原点といえる。

キリスト教において、祈りはすべての源だが、隣人愛は実践されてこそ意味がある。学生時代、事あるごとに「看護は実践の科学である」と教えられた。看護は精神論ではなく、実践されるところに意味がある。自分の技術を愛の実践に活かすことができるのが、看護の魅力である。

看護師として

当時、私は小さなキリスト教系病院で管理栄養士として働いていた。「『患者の隣にキリストがおられる』とはどういう意味なのか」、「クリスチャン医療者とはどういうものなのか」と興味が湧き、教会に通い始めた。やがて、私の手を神様に使っていただきたい、直接患者さんに触れて奉仕したいという思いが強くなり、看護師になる決心をした。

ところが、いざ洗礼を受けるとなると決心がつかず、教会からも遠のいていた。しかし、実習先病院で、入院中の司祭が祈る姿を見て、「神からは逃れられない。どこまでも私を迎えに来る」と観念し、受洗した。この時に、宣教(神の愛を伝えること)とは声高に神の愛を叫ぶのではなく、静かに祈る姿だけでも十分であると悟った。

看護の現場にいと、前述の「深く憐れんで、手を差し伸べてその人に触れ(る)」というキリストの姿を思い出す。聖書には、病気の人を癒す多くの奇跡物語が記されている。深く憐れみ、手を差し伸べて下さるのは神である。その先の、その人に触れるという行為は私たちに委ねられている。障害児者は天使だという言葉をよく耳にするが、彼らは天使ではなく、どこまでも私たちと同じ人間である。しかし、彼らのそばには、たくさんの天使がついていて、彼らはたくさんの天使たちとともに生きていると思うことがある。私たちが人に触れる時、たとえ奇跡が起こらなくとも天使が微笑んでくれますように。そういう看護をしていきたいと願っている。

【講師プロフィール】 中東 加保梨 (なかひがし かおり)

管理栄養士として勤務の後、聖母大学(現上智大)に入学。聖母大在学中に、徳田教会で受洗(2011年)。2014年より都立北療育医療センターで看護師として勤務。

【セッション 2】 ライフワーク分科会 Part2 A 会場

「～東南アジアでの国際医療支援を経て～」

講師:海老原 慧(透析クリニック勤務 看護師、臨床工学技士)

【要旨】

僕が国際協力分野に興味を持ったのは小学生のときでした。通っていた小学校が大学の近くにあるため、留学に来ていた大学院生の子供がたくさん通ってくるなど国際色豊かな教室でした。また、教会に行けば、神父や信者に外国人がおり、国際的な交流が比較的多かったです。そうした中で、世界には厳しい環境に置かれ苦しんでいる人が想像している以上にいるんだということを知り、漠然とそういった苦しんでいる人たちに何かする仕事につきたいと思ったのを記憶しています。しかし、それから年月が経つにつれ、そんな思いは忘れて、進路の事を真剣に考える高校3年生になった時には、人と比べ特に秀でた所もなく、そのくせ、人がやっていないことをやろうという焦りがありました。そんな時、昔、国際協力をやりたいと思っていた気持ちを思い出し、何ができるだろうと調べた結果、医療の世界が国際協力への現場に一番出て行きやすいと考えました。しかし、医師になる学力はなく、看護師を目指しました。それは、目指している先が、医療ではなく、国際協力であったため、資格はなんでもいいと思っていたというのがあります。

スタートがそんな感じですので、当然の如く大学受験は失敗し浪人、だらだらと大学生活を過ごしていたため留年などもしましたが、無事に卒業し、看護師、保健師を取得しました。

最初の就職先は、国立国際協力研究センターの手術室でした。病院に関しては、名前につられて決めただけでしたが、手術室というのは必須の希望でした。それは、国際医療の現場に出ることを考え、何が一番役に立つかと考えた時に、手術室や救急での知識や技術だと思ったからです。2年間で手術室の仕事は一通りのことができるようになり、ちょっと早いと思いましたが、NGO Japan Heart に入りそこから国際医療の現場で活動が始まりました。

僕が、人生のターニングポイントに立った時、いつも意識しているのは、「選択と行動」です。その時々時代の流れの中で、自分にとっての最善を考え、後悔のない選択をし、どのように行動するのが、人生を生きていく上で重要だと思っています。振り返って見れば、間違った選択はあったかもしれないが、少なくとも後悔するような選択はなかったように思います。今はやりたいことがなかったり、進路に迷っている人がいるとしたら、後悔のないように選択し行動してほしい。信念を持ち、真剣に行動をして入れば、それが自分にとっての道となるように思います。

【プロフィール】海老原 慧 (えびはら さとし)

岡山県出身。2010年横浜市立大学卒業。看護師・保健師。国立国際医療研究センター手術室勤務。2012年より特活ジャパンハートにて活動開始。半年間ミャンマーでの医療活動を経て、カンボジア事業コーディネータとして2年間活動。その活動を通じて、力不足を痛感し、帰国後2016年臨床工学技士資格取得。現在、都内透析クリニックにて勤務しながら、東南アジアにおける医療支援に関与。

【セッション 2】 ライフワーク分科会 Part2 B 会場

「心臓病の親子に寄り添う」

講師:八島 正文(国立大学法人東京医科歯科大学医学部付属病院 小児心臓外科医)

【要旨】

現在私は先天性心疾患の外科治療を行なっています。お子さんを対象とする事が殆どですが、時代と共に大人の方を手術する機会も増えつつあります。小児心臓外科医療に携わって四半世紀以上が経ちました。「世紀」という単位が自分の人生に登場するとは考えていなかったのですが、こうやって歳を取っていくのだなと実感する今日この頃です。

さて、タイトルを「心臓病の親子に寄り添う」としましたが、本当に最初から寄り添う気持ちがあったのかと問われると、もちろんありましたが今よりもかなり希薄だったと言わざるを得ません。

入局当時、同期の医師は私を入れて 15 名でした。仲間であるとともにライバルでもあり、誰が一番最初に執刀したかとか、誰が一番最初に学会発表を行なったかなど、皆がお互いを意識していたと思います。医師に成り立ての頃は同期や同僚の視線を意識しつつ、初めての臨床の現場で早く知識を身につけ、技術を取得する事で精一杯でした。また勤務形態は手術室と集中治療室で過ごす時間が 9 割以上を占め、次々とやってくる患者さんの手術と術後管理に追われ、手術前や手術後元気になった患者さんやその家族と関わる時間は多くありませんでした。よく病気ではなくその人を診よと言われますが、その様な環境ではどうしても疾患の治療や手術手技を重視してしまい、患者さん本人と家族に向き合う心は芽生えにくかったと思います。

そのようなスタートでしたが、患者さんと家族に接する心の変化が生じた転機は 2 度あったと思います。

最初の転機の訪れは出張先の病院で出会った上司の影響でした。その上司からは、いつでもできるだけ何回も家族と話さないと指導され、実際ご自身も時間が空く度にベッドサイドへ行って、患者さん(とは言ってもほとんどはまだお話ができない年齢でしたが)と親とコミュニケーションをとっていました。私も親と話す機会が増え、少しずつですが、親が子を思う気持ちを感じるようになって行ったのです。

2 度目の決定的な転機は自分が親になった時に訪れました。当時は小児救急当番も務めていましたので、心臓病の親子の他にも救急外来を訪れる親子とも接していました。深夜に訪れる患者さんのほとんどは軽症で、入院の必要がない事が多いのですが、患者さんを帰宅させるにあたり親を納得させる事が一苦勞でした。なぜここまで熱心なのか不思議でしたが、自分に子供が生まれて腑に落ちました。親はいつでも子供のことにに関して必死で、医師とのやりとりは真剣勝負だという事を自分の体験を通して実感しました。無償の愛の存在を初めて理解できたのです。正直に告白しますと、我が子が可愛いのは言うまでもありませんが、この頃から他人の子供も同じように可愛いと思うようになりました。

職業柄、自分の生活において患者さんとご家族の都合を優先する場合は元々多かったのですが、そこに仕方なくと言う気持ちがあったことは否めません。しかし最近では仕方なくと感じることがなくなりました。親の大変さを経験したからなのかもしれません。寄り添う心が育ちつつあるのかも知れません。

これから私がもう少し歳を取ると、患者さんは孫に相当する年齢に、患者さんの親は私の子

供の年齢に当てはまると思います(一部すでに当てはまる世代も登場しています)。その時に心がさらにどう変化するのか、或いはしないのか、神の味噌汁ですね。

【講師プロフィール】 八島 正文 (やしま まさふみ)

1967 年生まれ、50 歳男性、福島県出身。

2015 年清瀬教会にて受洗 (霊名 ルカ)

職業 医師(小児心臓外科医)

経歴:1991 年福島県立医科大学医学部医学科卒業

同年 東京女子医科大学附属日本心臓血圧研究所外科入局、

心臓病センター榊原病院、NTT 東日本関東病院、綾瀬循環器病院、岐阜県総合医療センターにて勤務

2009 年京都府立医科大学 小児心臓血管外科 助教

2012 年東京医科歯科大学 心臓血管外科 助教

専門 先天性心疾患の外科治療(新生児から成人まで)

資格 外科専門医 胸部外科認定医 心臓血管外科専門医

趣味 スクーバダイビング 子供と笑いのネタを探す事

特技 辛い出来事は忘れてしまう事

【セッション 2】 ライフワーク分科会 Part2 C 会場

「共に歩む～医療ソーシャルワーカーの視点を通して～」

講師: 漆原 めぐみ(聖ヨハネ会 桜町病院 地域医療連携室 医療ソーシャルワーカー)

【要旨】

私は現在、修道会の使徒職として病院の地域医療連携室に派遣され、医療ソーシャルワーカーという仕事に従事している。

医療ソーシャルワーカー(Medical Social Worker=MSW)とは、社会福祉士、精神保健福祉士等の国家資格を有し、医療現場において社会福祉の立場から患者さんとそのご家族の経済的、社会的、心理的な悩みなどの相談を受け、生活上の問題解決のお手伝いをさせて頂く相談援助職である。

私自身、大学卒業から現在に至るまで社会福祉の現場に携わらせて頂いている。

私がこの仕事をする上で参考にしていることがある。それは「ソーシャルワーカーとは伴走者である」という考え方である。「伴走者」とは視覚障がい者の方のマラソンなどで競技者のそばについて走り、走路や給水所の位置を知らせ、安全に競技が行え、無事にゴールできるように支援する人である。そこには目には見えないが信頼関係が必要となる。私たちソーシャルワーカーにとって大事なことも相談者の方との間に信頼関係を築くことである。

私が派遣されている聖ヨハネ会・桜町病院は地域に密着した病院としてまたカトリック病院として地域住民の方々、また弱い立場におかれているの方々(生活保護、生活困窮、難民、ホームレス等)の診療にあたっている。

相談を受けていると、患者さんが疾病や障がいを抱えつつ日常生活を送る中で「生きづらさ」を感じていることがわかる。しかし、そのような状況にあっても現実的に一歩を踏みださなくてはならない。そのときに、私たちMSWIに求められるあり方は傍らに寄り添い、その一歩を踏み出せるよう共に歩む姿勢が大切だと考える。

本講では、社会福祉士の仕事に進んだきっかけや自分自身の修道生活の召命などにも触れながら医療ソーシャルワーカーの視点を通して、患者さん、ご家族、関係機関との日々の関わりの中で生まれてくる学びややりがいなどをお伝えできればと思う。

【講師プロフィール】 漆原 めぐみ (うるしはら めぐみ)

社会福祉士、精神保健福祉士

福音史家聖ヨハネ布教修道会(略:聖ヨハネ会)会員

日本社会事業大学・社会福祉学部、同大学・専門職大学院卒業

大学卒業後、生活指導員として某カトリック青少年施設に勤務

その後、社会福祉法人聖ヨハネ会経営の高齢者施設にて生活相談員として働く。

修道会入会後も引き続き高齢部門、また障がい部門での現場経験を経て、現在は同法人・桜町病院の地域医療連携室で医療ソーシャルワーカーとして勤務している。

【セッション 3】

「かたりば～哲学対話～」

講師：小川 泰治(国立東京工業高等専門学校非常勤講師 等)

【要旨】

「明日までにすべき仕事は何か」「この患者に対してどのような治療が可能か」など日々の生活では具体的な答えを要する問題が私たちが悩ませています。その一方で、「何のために生きるのか」「だれかのため」とはどういうことか」「私たちはなぜ“信じる”のか」など、簡単に答えの出るものではないけれど、子どもの頃からふとしたときに考えてきたような問いもあります。

本セッションでは「哲学対話」という手法を通して、日々の忙しい生活のなかでは通り過ぎてしまうような問いについてあえて立ち止まりみなさんと一緒にゆっくり、じっくりと考える時間をもちます。それぞれのグループには哲学対話の経験の豊富なファシリテーターが加わりますが、あくまで議論の整理とシンプルなルールの管理をするのみで、問いを提案し、それを考えるのはみなさん自身です。哲学対話は現在、国内でも教育現場などで取り入れることが始まっているほか、医療・看護の現場で日々具体的な事態に直面する方々のあいだで「ケア」を問い直すためのものとしても注目が集まっています。

「そんな問いは考えても意味がない、それこそ“哲学者”に任せておけばいい」と思われるかもしれません。ですが、はたしてそうでしょうか。むしろそのような問いにこそ、私たちは日々悩んだり、苦しんだり、もがいたり、あるいは純粹に知りたいと思っているのではないのでしょうか。たとえば、「人は何のために生きるのか」という問いには、それぞれの幸福感や生きる目的があり、答えはどれだけ話しても一つには定まらないかもしれません。しかし、だからといって、この問いがどうでもよい問いであるということにはなりません。むしろ、答えが一つに容易に決まらないからこそ、お互いの考えの理由や背景を述べあい、ときに批判的に検討しあうことが可能になり、ときに自分自身のこれまでの考えを問い直すことが、自分を前に進めてくれることもあるでしょう。

本セッションでも一つの問いについてなにか確実な答えにたどり着くことはおそくないでしょう。むしろ、話す以前よりもよくわからなくなる、という経験を多くされるかもしれません。私たち自身も、私たちの世界も、私たちが思っている以上に複雑な面があります。だからこそ、たくさんの方の考えを聞きながら対話をすることで、ただ漠然とわかっていなかったことの「わからなさ」について理解が進むこと、また、わかっていたつもりの方が実はよくわかっていなかったのだとわかるようになること、は私たちにとって確実な前進だと思います。

大切なことは年齢や身分、職業を超えて、お互いが対等な立場で、自分の言葉で、話をしてみることです。ぜひ、わからなさのなかでじっくり立ち止まって考える対話の時間を楽しみましょう。

【講師プロフィール】 小川 泰治（おがわ たいじ）

1989 年生まれ。国立東京工業高等専門学校、東洋高等学校、開智中学・高等学校非常勤講師。上智大学哲学科卒業、早稲田大学大学院文学研究科哲学コース博士後期課程単位取得退学を経て現職。休日には地域で子どもの哲学の実践を行う。分担執筆に『こころのナゾとき 小学1・2年/ 小学3・4年/ 小学5・6年』（成美堂出版、2016 年）など。論文に「子どもの哲学」における対等な尊重（『フィロソフィア』、2017 年）、「子どもの哲学」における知的安全性と真理の探究 — 何を言ってもよい場はいかにして可能か（『現代生命哲学研究』、2017 年）がある。

【セッション 4】

「いのちに仕える」

講師：竹内 修一

【要旨】

「いのちとは、いったい何だろう」——この直截的な問い掛けに対して、私たちは、戸惑いながらも答えを尋ね求める。それにもかかわらず、いつも、(これで十分)といった答えは与えられない。(なぜだろう)。いのちは、こんなにも自分の中心にありながら、その深みはいつも自分の理解を超えて行く。

いのちの体験——三つのことに気づかされる。まず、自分のいのちは、初めも終わりも与えられたものであるということ。いのちは、与えられるもの(恵み)であって、造り出すもの(生産物)ではない。次に、自分のいのちは、自分のものでありながら、自分だけのものではないということ。そして、すべてのいのちは、唯一の根源(いのちそのもの)から来て、そこへと向かっているということ。もしそうでなければ、この自然界を統べる秩序について、どう説明ができるというのだろうか。この秩序を前にして、私たちは、頭を垂れ、沈黙し、^{おそれ}厳かな畏怖を抱く。

ときどき「いのちの尊厳」といった言葉を聞く。だが尊厳とは、いったいどういう意味なのだろう。ふと心に浮かんだ二つの言葉——「かけがえのなさ」と「ありがたさ」。「かけがえのなさ」とは、他のどんなものとも代替できないということ。「ありがたさ」とは、滅多にないということ。きっと、いのちは、ただあるということだけでも意義があるのではないか、とそう思う。

私たちは、他のいのちとの共感・共生・協働なしには生きて行けない。それゆえ、私たちに求められること——それは、自分が出会ういのちに寄り添い、互いのいのちに仕え合うということ。それによって、私たちは、初めて真の仕合せへと招かれる。

自分のいのちは他のいのちによって生かされている——それを忘れるとき、人は、傲慢になるだろう。自分のいのちは他のいのちを生かしている——それを忘れるとき、人は、希望を失うだろう。

【講師プロフィール】 竹内 修一 (たけうち おさむ)

カトリック司祭(イエズス会)。上智大学(哲学修士)、Weston Jesuit School of Theology(STL: 神学修士)、Jesuit School of Theology at Berkeley(STD: 神学博士)。上智大学神学部教授。キリスト教文化研究所所長。専攻: 倫理神学(基礎倫理、いのちの倫理、性の倫理)。著書: 『【徹底比較】仏教とキリスト教』(共著、大法輪閣、2016年)、『希望——ひとは必ず救われる』(共著、教友社、2016年)、『愛——すべてに勝るもの』(共著、教友社、2015年)、『教会と学校での宗教教育再考』(共著、オリエンズ宗教研究所、2009年)、『ことばの風景』(教友社、2007年)、『風のなごり』(教友社、2004年)、その他。論文: 「いのちと平和」(上智大学キリスト教文化研究所『紀要』、2017年)、「いのちに仕え平和を築く」(東京純心大学キリスト教文化研究センター『紀要』、2016年)、その他。